

# かさおか

発行所  
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛  
笠岡市用之江377  
郵便番号714-0066  
(0865)  
電話 66-1311  
FAX 66-1314



初代の心にかえり信仰の喜びを  
深めよう 伝えよう 広げよう  
一、持ち場立場で日々理作り  
一、家族揃って教会参拝  
一、一日一件にをいがけ

立教173年  
2月号



年頭会議における大教会長様ごあいさつ

## 日々に努力を重ね 喜びの輪を広げよう

来年に控えた大教会創立百二十周年記念祭に向かって三年千日と仕切って成人の歩みをしている、その一年目として、昨年は一年それぞれ精一杯におつとめくださいましたことを心より御礼申しあげます。

今年は二年目ですが、どういう思いで成人の歩みをすればよいか、親神様・教祖・真柱様にお喜びいただける一年になるためには、どう歩んだらよ

いかということをし少し申して、今日の新年の挨拶としたいと思います。

### ◎「創立記念祭」の位置付けとその大目標

改めて、心に置いていただきたいのは、この創立百二十周年の歩みというものは、教祖百三十年祭に向かっての成人の歩みの「途中の山場」としての歩みです。

「教祖百三十年祭」が大きな目標であって、「大教会創立百二十周年」は、その中間の大きな山場としての位置付けでもって、この三年千日を歩んでいます。

その百三十年祭に向かっては、「教祖百三十年祭のときには、それぞれの教会で、教祖百二十年祭のときより一人でも二人でも、おつとめ奉仕人を増やそう」という目標を掲げて歩いている最中

です。ですから、方針が変わった、その目的が無くなった、それとは全く別の形で動いているということではなくて、「おつとめ奉仕人の増員」を大前提としての、この創立百二十周年の歩みです。

二年目を迎えるに当たって、改めて、そのことを心に置いていただきたい。

### ◎この三年千日の意義

では、この百二十周年の歩みは何かと言え、私は、教祖百三十年祭に向かって成人するための、言わば「基礎体力作り」だと思えます。

高齡の登山家・三浦雄一郎さんは、大きな山に登っていくために、日々、トレーニングを欠かさない。それがあからこそ、山に登っていけるのです。

百三十年祭により大きな成人の歩みを進めていくためには、歩むべき足下がフラフラだったり、弱かったり、体力がなかったら、それは百三十年祭という大きな山場に向かって登っていけない。ですから、言わば「基礎体力作り」が、私はこの百二十周年に向かっての歩みであり、また、そこにその意味合いがあると思うのです。

### ◎「基礎体力作り」に必要なこと

ということとは、何が大切かと言えば、「日々の歩み」が大切だということです。

そのために、百三十年祭に向かって何か一つ心定めをして、それを、百三十年祭まで、毎日コツコツ十年間、やり続けていこうではないか、ということ、もう昨年、一昨年、申してきているわけです。

それは何でもいい。「親神様・教祖、ありがとうございます」という心でつとめること——これを

今日一日の心定めとしてつとめる、理作りとしてつとめる、というものを、何か一つ心定めして、それをつとめてほしい。

つまり、この「日々の理にしていこう」ところに、実は大きな「基礎体力作り」があるということなのです。

百三十年祭だけパツと頑張ればいいというのではありません。百三十年祭という大きな山を越えていくためには、そこに向かって、今、緩やかなときにこそ、体力を付けていかないと、本当の意味でのその大きな山を越えられない。

ですから、この大教会の創立に向かっての歩みは、緩やかな歩みかもしれません。しかし、確実にきちんと歩いていく、「日々の積み重ね」を歩いていくということが、大事だということです。一つ目の項目、「持ち場立場で日々理作り」が、いかに大事かということです。

これは、百三十年祭への理作りの延長線上での話ですから、百二十周年に向かってても、百三十年祭に向かってても、同じく続けていく必要があります。

そのことを皆さん方には先ず心に置いていただきたい。

### ◎初代の心にかえるための「努力」

また、「初代の心にかえり」ということが大前

提にあります。無い命をたすけていただいた初代の人たちは——「今日生きている、はあ、今日も元氣や、今日も体を動かさせてもらえる、はあ、今日もご飯食べさせていただく」——日々が、喜び・感謝一杯だったのではないのでしょうか。

だからこそ「ご恩報じ」として、ひのきしんも、教会の御用もし、御供もし、そして、もちろん人だすけの理にも歩むことができた。日々の喜び・感謝の気持ち、ふつふつと心の中にあっただからこそ、そういう歩みに繋がっていったのではないのでしょうか。

大病を患った人なら、「はあ、本当にそうやったな、たすけていただいた元一日があるなあ」といって思い返すことができます。そういう不思議なご守護いただいた人なら、思い出すこともできるでしょうから、「はあ、忘れておったな、また、これからほんなら本当に日々喜ぼう」という心に気づくことができるかもしれません。



しかし、代が重なってくると、あるいは、中には、大きな身上も事情もなくて、何不自由ないままではいかなくともそれなりに人並みに暮らしてきた道筋があるわけで、そうしたときに、日々が喜び・感謝一杯になれるか、あるいは、初代の心に振り返ることができるか、と考えてみても、想像はできても、なかなかその初代のときの喜び・感謝の気持ちというのは、私たち、代を重ねてきた人間にとってみれば、私たちが、代を重ねてきた正直なところではないのでしょうか。

とすると、動もする<sup>や</sup>と形の信仰になってしまう。ひのきしんさえしておけばいい、教会の御用さえしておけばいい、おつくしさえしておけばいい、という形に、動もする<sup>や</sup>となってしまう。

だから、教会の雑用をしていると何か一日御用が済んでしまった——「ああ今日も御用は済んだな」——になってしまう。

御用は「済んだから良かった」という安堵感を得ても、喜び・感謝一杯の中の御用になっただかどうか改めて考えてみて、もしそうでないとするなら、これは反省しなければならぬところではないかと思うのです。

とするなら、初代の心にかえるには、「努力」をして、日々喜ぶ心に立て替えていかなければならないのではないかと思います。

喜び・感謝の心がないから、できないとかしな

いではなく、ないならば、なおさら、そういう初代の心——喜び・感謝の心でひのきしんし、喜び・感謝の心で教会の御用をし、喜び・感謝の心で御供をし、そして、にをいかけ・おたすけを喜び・感謝の心でつとめる——に、近づく「努力」が必要です。

そういう心があってできれば、それでよいのですが、やってもなかなかそうならないなら、そこに近づく「努力」はしなければならぬと思います。

その「努力」に、「日々の理作り」の意味があるということですが、

心定めたから「すればよい」・「しなければならぬ」ではなく、「先ず、理作りとして、喜び・感謝(親神様・教祖に御礼を申しあげる)の心を置いてから、させていただく」ということが大事だということですが、

皆さん方を始め、それぞれの教会に繋がるよふぼく・信者の皆さんも、どうぞ、些細なこと、ほんの小さなことで構いませんから、「日々の理作り」というものを心に置いてつとめていただきたいと思います。

### ◎二年目(今年)の重点項目

皆さん方、いろいろな人と話をしている中に、三年千日一年目の昨年は、どちらかと言うと、



「日々の理作り」ということに重きを置いてつとめていただいた感があるという気がしました。

それでは、今年は二つ目の事なのかなという思いもしますが、考えてみれば、これは順序です。実践項目の「順序」という言い方はおかしいかも知れませんが、成り立ちの順序からいけば、当然、そうなっています。

信仰の喜びを先ず自らが「深める」ことによつて、その喜びを子どもに周りに「伝え」ていく、今度は「広がり」になっていくわけですから、順序にしたつもりはありませんが、知らず識らずに順序という一つの姿になってくるものかなと思うのです。

かと言って、一年目は「持ち場立場」、二年目は「家族揃って」、三年目は「一日一件」ということではなく、これはもちろん三年間通してそれぞれをしていたことに何も間違いはありません。

ん。

どれかをすればよいということではなく、もちろん三つともするのですが、一つひとつに重きを置いてするのなら、一つの「順序」というものは、生まれてくるかもしれないと思います。

ですから、もちろん三つとも心に置いてつとめますが、その中の二つ目の項目「家族揃って教会参拝」ということを重点に置いて、今年一年、成人の歩みをしたいと思います。

これにつきましては、真柱様の年頭のおことば、また、昨年の秋の大祭のおことばの中で、「家族揃って教会参拝」ということの意味合いについて、その大切さについて触れておられますが、

家族の団欒は、銘々の心一つで味わえるものだと思うのであります。にもかかわらず、そのための心遣いを知らないがゆえに、陽気ぐらしとはほど遠い生き方をしている人々が、世間には大勢いるのであります。それだけに、私たち自身が互いに心を合わせ、たすけ合う家族の姿をつくり出し、周囲へ映していく努力が求められている。(秋季大祭講話)というふうには仰いました。

家族の団欒の姿——家族お互いが、夫婦、そして親子、家族みんなが、本当に道のよふぼくとして、よふぼく家庭として、たすけ合うその姿——が世の中に映っていくということが、お道の一つ



春季大祭講話

元の理をよく心に修め  
布教力の向上に努めよう

世話人 島村廣義 先生

春の大祭は、どういふところであつたられてい  
るものかといふことは、よくそれぞれご承知のこ  
とですが、明治二十年陰曆正月二十六日、教祖が  
お姿をお隠しになったことに、その元があるわけ  
です。

その理由は子ども可愛い一条の親心——立教の  
元一日、世界一れつをたすけるために天降ったと  
宣言されましたが、この子ども可愛い一条の親心  
——一日も早く世界一れつの子どもをたすけあげ  
たいといふ、この成人を急ぎ込まれる親心から、  
お姿を隠し、そして存命の理をもって働かれるよ  
うになった、このことが原因です。

教祖は、五十年に亘ってひながたを示され、世  
界一れつをたすけるための手立てとしておつとめ  
を教えられ、その完修を急ぎ込まれました。

このつとめはどういふおつとめかと申します  
と、親神様が無い人間無い世界をつくられたとき  
のお働きの理を手振りに現わしてつとめるおつと

う心から、仰せ通りになかなかおつとめをつとめ  
る決断が下されなかつた。

諄々とつとめをつとめること、教祖のお急ぎ込  
み、これが身上を台にして厳しく仕込まれ、急ぎ  
込まれる親心に決心をもって、教祖の仰せ通りに  
おつとめをした。その結果がお姿を隠されるとい  
うことに繋がっていきます。

姿を隠されたといふことを思うときに、教祖の  
御身を氣遣う当時の先生方のお心を、教祖は、誰  
に氣遣うことなく何の氣兼ねもなく教え通りにお  
つとめができるように、自らの姿をお隠しになつ  
た。そして、存命の理、存命のお働きをもって積  
極的なたすけ一条の道、たすけの道の発動をされ  
たと、私はこのように受け止めています。

お姿を隠されてから、広く一般におさづけの理  
を渡されるようになりました。  
また、教会本部の設立をお許しになり、それを  
もって、土地処にも教会名称の理を許されるよう

めです。その理をもって世界  
一れつをたすけあげると仰い  
ます。

当時、おつとめをつとめると、  
政府・官憲の迫害・干渉厳しく、  
教祖に御苦勞をお掛けするか  
ら、初代真柱様を始め当時の  
先生方が、をやを思う、氣遣

になりました。この教会名称も、おつとめをつと  
めるといふ心定めの上に許されたものです。  
たすけ一条の道として教祖はこのつとめときづ  
けをもってたすけあげる道筋を立てられました。



◎「元の理」・「十全の守護」が信仰の根本

このおつとめの理をよく解らせようとして教え  
られた「元初まりのお話」・「親神様の十全の守護」、  
このことについて、今一度、ここでお互いに思案  
したいと、私はこのように思います。

「おつとめの理」がよく解るためにも、この元  
の理のお話・元初まりのお話で教えられること、  
そして、親神様の十全の守護ということ、しつ  
かり心に修めるといふことが何よりも大切なこと  
だと思ふからです。

たすけ一条の道を進める、このおたすけの唯一  
の拠り所、これがこの親神様のご守護です。  
お互いに入信の元一日、身上・事情をたすけら

れたときのことを振り返ってみますと、誰しもが、一番先に耳にするのが「かしまの・かりもの」の御教理です。

おふでさきにも

たんくとなに事にてもこのよふわ

神のからだやしやんしてみよ 三 40・135

にんけん八みなく神のかしまのや

なんとをもふてつこているやら 三 41

めへくのみのうちよりのかりものを

しらずにいてハなにもわからん 三 137

とお教えくださいます。

特に、

たんくとなに事にてもこのよふわ

神のからだやしやんしてみよ 三 40・135

このお歌は、全く同じお歌が、おふでさきの中に二度出てきます。

世の中のもの、すべては親神様のつくられたものです。全宇宙は親神様のお身体です。親神様から、この身上を貸していただいて、そして、天地抱き合わせの親神様の懐で私たちは親神様のご守護をいただいで生かされています。

私たちの生かされている一つの目的は「陽気ぐらい」——陽気ぐらいをするのを見て共に楽しみたいと思召す親神様のお心——これにしっかりと添うということが、私たちの生きる目的です。

親神様からお借りしているこの身体、このかし

もの・かりものということが解らなければ、すべてのこと、何もかも解るはずはないと仰せになります。

裏返して申せば、このかしまの・かりもの御教理が心に心底修まれば、すべてのことが見えてくる、親神様のご守護の世界が見えてくると教えられます。

そういうところで、この親神様のご守護、十全の守護をしっかりと心に修めること、これが私たちの信仰の根本だと思います。

ここから、おたすけということも、また、自らの成人ということも始まります。



### ◎くにとこたちのみこと様の御守護

そういう上で、いろいろと思案しますが、先ずは、十全の守護の中でも、このくにとこたちのみこと様をもたりのみこと様、この神名をもって

現わされる御守護は、これは月日の理を表わす神名で、しかも、これは、対を為して、いろいろと心に修めなければならぬと思います。

「月日」と表わされる、くにとこたちのみこと様をもたりのみこと様、これは親神様そのものの呼称です。一番根本的な守護の理を表わされたと思います。

「天にては月様と現われ給い、人間身の内の眼うるおい、世界では水の御守護の理」と仰います。

お月さんが満ち欠けするということ、ここから暦が成り立ちますが、また、このお月さんの働きというのは、潮の満ち引きにも大きな関係があります。また人間身の内では、女性の生理もその働きの関係だと悟るのです。

「人間身の内の眼うるおい」と仰いますが、赤ちゃんが母親の胎内に宿り、最初の一月目で眼が形作られます。人間の一生は眼から始まります。

このことは、教祖の逸話の中で「一七〇 天が台」というお話の中に、

この世の台は、天が台。天のしんは、月日なり。人の身上のしんは目。身の内のしん、我が心の清水、清眼という。

とお聞かせいただきます。

神経の系統全般、これが眼という言葉によって強調されていると悟るのですが、神経系統全般だと「理性」というものを、この眼というお言葉の

中からいろいろと思案します。

「くにとこたちのみこと様のお働きは、「水」のお働きですが、をもちりのみこと様と深い関係があります。をもちりのみこと様と二つ一つに考えると申しましたが、後でお話しする「熱」をコントロールするの「水」のお働きです。

眼の身上をいただいたときにいろいろな悟り方をしますが、「世界を結構に見られる」という眼のお働き、これをいろいろと考えてみましょう。

くにとこたちのみこと様は、方位で表わす(かぐらづとめの方位を考えると、「北」の方に位置しています。

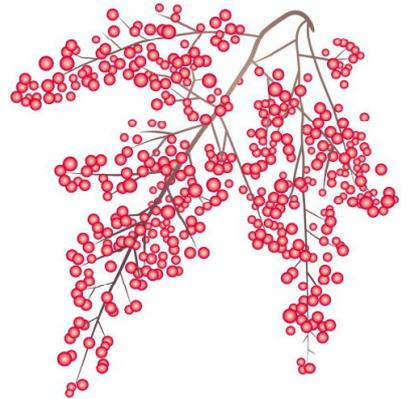
「北」ということを、十二支では「子<sup>ね</sup>」という言葉で、その方位を表しますが、「子<sup>ね</sup>」という言葉は、また時刻では、夜の十二時、午前零時を意味します。

真夜中ということになりますが、これが一日の始まりです。いろいろ願ひ事をするときに、「子<sup>ね</sup>の刻詣り」というようなことを世間でも言います。

教祖のお話しを記した「こふき本」という本があります。『榊井本(明治十六年本・神の古記)』という本の中に、

此世と云うは、夜から世ふ照らしなざる月様が先はじめ、夜から始まりた此の理をもって、此の世と云う。

というふうにかかれていきます。



「夜の御守護」ということに悟るのですが、そういうことから言うと、私たち自身の信仰の上から、このくにとこたちのみこと様のお働きを御守護いただこうとすると、人の知らない人の見ていないところで、しっかり陰徳を積む、良いことをさせてもらうことが、結構をお見せいただく要点だと悟るのです。

また、夜は夜露を下げることで万物に隔てなく潤いを持たせ、子どもも夜飲んだお乳で育つと、よく世間でも申します。

隠れたところで慈悲の心を持って真実を尽くし、見えないところで結構な心遣いをする、これが、眼の御守護をいただく、一つの精神定めになると、私はこのようにも悟るのです。

「水は方円の器に従う」という言葉もあります。が、低い心で通るといことが大切です。

私の祖父(島村)国次郎は、普通の人と違って「神水<sup>こうすい</sup>のさづけ」というおさづけの理をいただきたい

ておりました。

御本席様から初めて「神水のさづけ」を頂戴されたのは、明治二十年五月六日、喜多治郎吉先生で、喜多先生の「身上願」に対して、

さあくこれまで長々退屈であったやろ。さあくこれよりたすけのため、水を授けよう。さあくこれより受け取れ、さあ受け取れ。とおさしづがありました。

「神水のさづけ」が初めてのこととて、当時の先生方は、どういうふうにしたらよいか解らず、「押して、水の訳に付願」と伺うと、

さあく授けたのは、心の理に与えたるのやで。たとえ途中にても、泥水でも、身の悪い者あれば、先に三口飲んで、後飲ましてやれ。というお言葉が下がりました。

「道中、身上に悩み苦しんでいる人に出会ったら、清水<sup>せみず</sup>がなかったら泥水でも構わないから、それを掬い上げ、先に三口飲んでからそれを飲ませてやれ」と仰せになっています。

続いて、「押して、水のおさづけの理由を尋ね」と伺うと、

さあくこの水というは、人間元初まりの時、三尺まで水中住居、この清水を与える理。又三口飲むは、三日三夜に宿し込みた、この理よって与える。

とお言葉が下がりました。

元の理の心・元の理のお話が、しっかり本当に心に修まったならば、御守護いただける——「元の理」によっておたすけただける——ということとを、具に教えられたお言葉であるようにも思います。

特に「水」ということについては

みづとかみとはおなじこと

こゝろのよごれをあらひきる 五下り目3  
と教えられますし、また、「水」に喩えていろいろと教えられることを思案するとき、本当に、このくにとこたちのみこと様のお働き、これを先ずはしっかり、お互いに心に修める、これが大切です。

### ◎をもちりのみこと様の御守護

続いてをもちりのみこと様ですが、「天にては日様、人間身の内のぬくみ、世界では火の守護の理」と仰いますが、体温を三十六度五分に保つということ、これは、をもちりのみこと様のお働きです。

先ほど、一ヶ月目に眼が出来ると申しましたが、二月目には、心臓(循環器系統)の機能がお腹の赤ちゃんの中で出来てくると聞き及びます。

心臓というのは血液を全身に送るポンプの役割をするところで、循環器のお働きです。

このをもちりのみこと様ということで、「熱」

というのは、一つの「エネルギー」という言葉にも置き換えられると思いますが、「熱」・「エネルギー」というような観点から、いろいろと思案できます。

「熱」はどうしたら出てくるのか——燃やすものがあり酸素があって、そういうものが整わないと燃えません。

これも、元の理のお話、また、かぐらづとめの位置を考えますと、飲み食い出入りのくもよみのみこと様(燃やす材料)と、呼吸器系統・かしのねのみこと様(燃やすために補給する酸素)、これが、をもちりのみこと様の尻尾に、ちゃんと繋がっています。循環器の系統のお働きをする、その一体化している姿です。

またもう一つ、をふとのべのみこと様(人間の成長)も、この一環の姿の中に結び込まれ、をもちりのみこと様の尻尾が繋がれています。循環器・消化器・呼吸器系統、これが一体化して、身体の「熱」・「エネルギー」を司られ、全部一体、一つのお働きをもって「育て」られるということが、よく解ります。

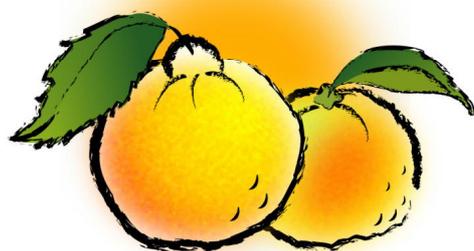
このことを思うと、「熱」ということ——「どんどん燃やして何ぼでも熱上がったらい」というのでは、これも大変で、四十度にもなれば、人間は正常な状態ではおれませんが——このコントロールをされるのがくにとこたちのみこと様・

「水」のお働きで、理性をもって、知性をもって、このをもちりのみこと様のお働きをコントロールされる。

「ぬくみ」も、「熱を出す」ことも「三十六度五分に保てる」というのも、くにとこたちのみこと様のお働きあつてです。

この月様・日様の両神が、親神様・天理王命様そのものです。後はみな「道具」だと仰います。

今日は「教理勉強会」をしているわけではありませんが、このようにくにとこたちのみこと様をもちりのみこと様、十全の守護の中でも、「親神様」と呼称されるこのお働きを考えてみても、本当に不思議を御守護いただき、私たち自身、こうして結構にお連れ通りいただいていることを実感します。



## ◎「元の理」「十全の守護」がたすけの原動力

このことを本当に心に修めてお互いがおつとめをする、世界だすけを祈念しておつとめをつとめるといふことです。

この「十全の守護の理」「元初まりのお話しの理」が心底心に修まらないと、おつとめというものは、その意義を失います。

このおつとめの理をしつかり心に修めるためにも、私たちは、元初まりのお話し、親神様の十全の守護、このことを、日々、しつかり勉強する努力を重ねたい、このように思います。

自分の信仰生活の中にも、また、おたすけの上にも、このことが根本です。

特にお互いの「にをいかけ」「おたすけ」ということを考えたときに、私は、

・このことがしつかり修まっていけないが故に布教に力が入らない、本当に力が湧いてこない。

・ここが本当に心に修まりさえすれば、もっと

もっとにをいかけ、おたすけ、それぞれの教会のおたすけ活動にも拍車がかかってくるのではないか。

と思います。

「自分のたすけていただいたことをお話ししなさい」と仰せになりました。そこから、「かしまの・かりもの」の御教理のお話しを取り次ぎ、親神様の十全の守護を人様に解っていただく、心に

修めていただく、そして、何のために、私たち自身がこうして生かされているかという、親神様の思召をお伝えすることが私たちのにをいかけ、おたすけです。

よふぼくとしての一番の力は、この元の理のお話し、そして、親神様の十全の守護を自分がしつかり心に修めて、それを説き分けられるということ、それが布教力に繋がると、私は思うから、その糸口を少しお話しました。



## ◎抛り所たる所以をしつかり心に修め直す

世の中、抛り所のない、また、それが故にいろいろ思い悩んでいる方々に対して、抛り所を教えられる私たちが、しつかり教えをお伝えし、一人でも多くの人に陽気ぐらしを味わってもらえるように頑張りました。真柱様も『天理時報』の元旦号、あるいは年頭のご挨拶でも話されました。

その親心に、私たち自身がしつかりお応えしたい、このようにも思います。

機会あるごとに「家族ぐるみで教会に参拝しましょう」ということを声掛け、それぞれにその心づもりでみなつとめていますが、一つ、よふぼくお互いがその抛り所たる所以をしつかり心に修め直しをして、神様に心を繋ぐということは、これを心掛けたいものです。

また、教会としても、ただ、「おいでなさい」というだけではなく、教会からも足繁くよふぼく、信者の方々の家へ尋ねて、心を繋ぐ、お互いの絆を深め合うということが、成人の上に大切なことだと思えます。

笠岡大教会も、百二十周年の記念祭に向けて、その活動に取り組んでいるところで、「初代の心にかえて、そして、信仰の喜び、これを深めよう」ということですが、自分がまた先祖がたすけられたときの喜びを我が心に喚び起こし、そのことを台として、親神様のお働き、親神様の御守護ということを改めてお互いが確認をし合って、そして、思召を伝える——我が事に留めずに、世の人々に映していくという——このことが、スローガンに込められた趣旨だと思います。

一つ、お互いに家族揃って、新たな気持ちで、しつかり親神様の思召にお応えできるようつとめ挙げたい、このように思います。 《以上要約》

## 雅楽勉強会開催

### 奉仕者育成目指して



練習の成果をお供え演奏

大教会雅鶯会(中島誠治楽長)は2月6日、大教会で第3回雅楽勉強会を開催、20人が参加した。

教会の雅楽奉仕者の育成を目的に少年会員、一般の初心者を対象に開かれた。

参加者は笙・箏・龍笛の管別に分かれ、6人の大教会雅楽奉仕者を講師に、管の持ち方、手の動き、唱歌など基本から学び、練習の成果として最後に会議室で全員が平調・越天楽をお供え演奏した。

中島楽長は「参加者が前回に比べて少なかった事は残念だが、少年会員の上達ぶりには正直驚いている。初めての子でも数時間で音が出る様になっている。鼓笛同様、雅楽の楽しさを、少年会員から広げたい」と今後の抱負を話した。

また参加者の1人、森本善修君(小2・海松ヶ岡分)は「雅楽はお父さんにすすめられて始めた。友だちがやっていないことをしていること、うまく吹けた時は嬉しい。正典おじちゃんのようにきれいな音が出せる様になりたい」と話していた。

## なぜか熊本産が津山で!!

### —— 鶴山分で珍しい果物育つ ——

本来、九州・熊本産の晩白柚(ばんぺいゆ)と呼ばれるミカンの一種の果物が、遠く離れた津山市の鶴山分教会(中島誠治会長)の庭で収穫された。

同会長が、以前、修養科一期講師として受け持ったクラスの人から、晩白柚の苗木が数本送られて来た。早速、同教会で植えると共に珍しい物なので近所の家にも配った。

生育場所が違うためか実がつく事はなかった。ところが5年程して立派な晩白柚が実った。実ったのは教会だけだった。

中島会長は「どうして教会だけ実ったか理由はよく分からないが、あきらめず肥をし続けた事が良かったのかも知れない。何事も根に、元にしつかりと肥をしていく事が大切なのでは——」と話していた。

大きさはバレーボール位で、味はグレープフルーツに似ているが少々上品な甘さがあるという。「百聞は一見にしかず」というが、実物は詰所主任室に。機会があれば一度ご賞味されてみては——。



手前の2個が普通のミカン

こころの詩

▼養徳社発行『陽気』誌二月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「見」、笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていきましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

佳詠 東悠分教会前会長夫人 田林 美智子

見て嬉し聞いて嬉しい陽気道

▼短歌三首

ふと見れば枯木に芽吹く命あり

四季は移ろう如月の庭

梅ほのか五夜の窓辺に明けを待つ

月次祭の朝あしたきびしき

水仙のほのかに匂う御神殿

感謝にいとおひ拝す一日の始め

東悠分教会前会長夫人 田林 美智子 さん

▼表紙の絵

小坂さんのプロフィール

神邊分教会 よふぼく 小坂道 和 さん

呉市生まれ。小・中・高校と神辺町で過ごす。高校卒業後、東京で商業デザイナー、鹿児島県大島郡での大島紬の織工を経て、その後、神辺へ。現在、地元町内会長のかたわら通称「かななべのまぼろしの絵師」として絵・書の創作活動を行う。笠岡大教会おぢばがえり団体タオルのデザイン、2010年神辺美術協会新春展ポスター制作。



# 天理教婦人会 創立百周年記念 第92回総会

立教173年 4月19日(月)  
平成22年/2010年

◆式典…本部中庭/午前10時 ◆講演会…午後1時

## 別席月間

3月20日～5月10日  
10月20日～11月30日

## 記念展示会

と き…3月20日～5月10日  
ところ…おやさとやかた南右第二棟

## 女子青年のつどい

と き…4月18日 午後3時  
ところ…天理大学袖之内第一体育館  
天理高等学校総合体育館

## 婦人会よろこび広場

と き…4月18日  
夕づとめ後～午後9時  
ところ…東・西泉水プール前広場 真南通り

## 春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます

親神様には「月日にわにんけんはじめかけたのわ よふきゆさんがみたいゆへから」と紋型ないところからこの世と人間をお創造はじめになったばかりでなく 御自愛溢れる親心と御守護のままに 今日まで結構にお育て下さっております事は誠に有難い極みでございます 加えて天保九年十月旬刻限の到来と共にこの世の表にお現れになり 私達一列子供の歩むべき道筋を正し 陽気ぐらし実現に導くべく 教祖を月日の社とお定めになり ひながたの道をお示し下さいました事は只々申し訳ない気持ちと 有難く勿体ない極みでございます

私共はその御恩にお応えさせて頂くべく 日々は朝夕に御礼申し上げますと共に 一人でも多くの人に真実の親の思いを伝えるべく 「つとめとさづけ」を用いながらにいがけおたすけにと勤め励ませて頂いております その中でもこの月二十六日は 教祖が世界ろくじに踏み均しに出られた尊い日柄でございますので おちばでは春の大祭が執り行われますが その理にならない 当教会に於きましても只今からおつとめ奉仕人一同 喜びと感謝の心も一入に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて 春の大祭を執り行わせて頂きます 御前には今日の日を楽しみに遠近を問わず 寒さ厳しき中も厭わず 寄り集いました道の子供達が相共にお歌を唱和し 尚も変わらぬ親心にお縋りする状を御覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

又 本日は世話人 島村廣義先生にお越し頂いております 後程おちばの声をお聞かせ頂きますが とにかくおちばに心一つに睦び合う心を更に深めて拝聴させて頂き 親神様教祖にお喜び頂けるよう実動させて頂く所存でございます

更には又各教会でのおつとめ奉仕人増員を目標に大教会創立百二十周年記念祭に向け 確実に成人の歩みを進めて行く所存でございます 中でも三年千日と仕切った成人の歩み二年目の今年には「家族揃って教会参拝」に重点をおいてつとめさせて頂きます 家族の絆が失われる事によって荒廃を進めている現代 夫婦親子そして家族が助け合う姿を世に写して行く事が 親心を伝えていくにいがけになると心に固く誓って成人の歩みを進めて行く覚悟でございます 又それを推し進めて行く為にも 学生会春の学生おちば帰りや婦人会創立百周年記念總會 として少年会子供おちば帰りや青年会布教推進週間等の各会行事も積極的に利用し 育成に力を注いで行く所存でございます

何卒親神様には 皆の親への御恩報じ一筋の誠真実の心をお受け取り下さいます 万たすけの上にも尚も自由の御守護を賜ると共に 初代の頃の信仰の喜びとたすけ一条に勇み立つ姿を今のお道の上にお現し下さいます お望み下さる陽気づくめの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

# ・原・稿・募・集・

**内 容**

①小随筆 ②教会・布教所の独自の活動の紹介 ③俳句・和歌・川柳 ④教会行事開催後の報告記事 等々

**字 数**

1000字前後(800字~1200字) 題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は1句からでも結構です。

**寄 稿 先**



下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵 便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江377

F A X：0865-66-1314

メール：**tenkasa@yahoo.co.jp**

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

## 大教会だより

### II 教会指令 II

#### ◎任命願

府中市 分教会

\*前任 豊田道人

\*新任 豊田宏哉

☆奉告祭 立教173年3月14日

立教173年1月26日承認

### ◎教会長資格検定講習会修了者

前期 立教173年2月14日終講

甲井 山田 要

照雲 岡本 由美子

### ◎第八二期修養科一期講師

自 立教172年10月1日

至 立教172年12月27日

弥高山 岡崎 和夫

## 計 報

### 奥忠儀氏

府鮮分教会前会長

一月十四日出直されました。

享年 九十六才

### 中島宇一氏

大教会幹部承事

鶴山分教会前会長

二月十三日出直されました。

享年 百二才



自然環境に恵まれた我が教会の周りには、色んな方が住んでおられる。非情に毛深い方々で、主に夜中、ひっそりと参って来られる。いきなり天井裏へ駆け込んで元氣よく走り回る方、これはイタタッチさんだろうか？朝、起きてみると、荒れた畑が掘り返されていることがあるが、これは、夜中、一生懸命自分の鼻先を使って耕して下さったイノさんのお陰だ。

う。タヌさんは、夜、道路を散歩されているのをよく見かける。そう言えば、先日、お尻の赤いエテ子さん達が、久しぶりに参って下さったが、旅の途中であったのか、足早に東の山へと去って行かれた。この方々の中には、庭先に有難くない物を置いていかれる方もある。勿論、教会に來られる方は、このような方々ばかりではない。服を着て車を使って、真実を運んで下さる人もおられるのだ。

人にも有って毛物に無いもの、そのものが人間らしさと言えるであろう。その一つは、孝心ではなからうか？。親を思い、親に孝行しようという心である。私は、今までに人間以外で親孝行をしている動物を見たことがない。聞いたこともない。どんな動物でも我が子を思い育てるが、生み育ててくれた親を思い、孝養をつくすのは、人間だけであろう。

そんなことを思いながら自分自身を振り返ってみた。果たして人間らしいと言えるであろうか？ 大分、毛深いのではなからうか？ (は)